

第42回里山一斉調査報告

文・写真 常俊容子（NOB里山委員会）



図-1 八尾・高安山
ソーラーパネル越しに
天王寺方面



図-2 あけびの花



図-3 台場クヌギ

第42回里山一斉調査は、従来通り14コースを計画。4月6日～27日に全コース開催、のべ140名(うち幼児～高校生21名)が参加しました。

今年の花暦はさらに例年より一層早く、サクラは北摂では葉桜のエドヒガン、名残りのヤマザクラ、カスミザクラ、満開のウワミズザクラ、綻びかけたイヌザクラまで。

鳥は街の近くで子育て中のツバメ、山中でセンダイムシクイ、オオルリ、野ではヒバリなど夏鳥が賑やかに季節の訪れを告げる一方でソウシチョウ(特定外来生物)も各所で確認されました。

小規模大規模の改変は今年も各地に見られ、茨木丘陵・鉢伏山では彩都東部地区の物流センターなどの開発が活発に。また風倒木整備後の植栽地で新たにナルトサワギク(特定外来生物)が侵入、同様に高槻・本山寺コースでは昨年抜いた第二名神エリア路肩で消えた一方、2018年台風による急傾斜人工林の甚大被害地復旧工事に伴う作業道に新たに出現しました。

府のホットスポットでもある和泉・信太山では「信太山丘陵里山自然公園」整備で持ち込まれた土から外来種含む移入種が多数発芽、人の利用も増える公園化の今

後に課題を残します。

川、池、田んぼなど農空間の様々な生きものに子どもも大人も豊かな自然を実感できる堺・鉢ヶ峯、一方で、里山100選やモニタリングサイト1000のコアサイトでもある枚方・穂谷では4つの谷のうち3つの谷で水田が消失、農空間の改変により稻作生態系の量と質の劣化による両生類やトンボなど生きものへの負の影響は顕著です。協会主導のプロジェクトも始まり地域で活動する里山ボランティアや高校の生物系クラブとの連携が今後の鍵となります。

八尾・高安山では宅地エリアで土の斜面がすっかり無くなったものの、山中いつもの場所でお馴染みの生きもの確認し安心。団地開発計画の影響か、種が減っている?四條畷・田原の里。箕面・才ヶ原では今年はオオサンショウウオを確認!

大阪府では一時減少から最新のデータでは増加に転じたとされるシカの影響は北摂の各コース、また名勝の地橋本・玉川峡でもますます顕著です。

また池田・五月山では、ナラ枯れ後にできたギャップで、鳥散布でよく増える陽樹でシカは食べず、他の高木層構成種の実生が育たないナ



図-4 茅木丘陵
彩都東地区の開発



図-5 橋本・玉川峠
サシバのペア



図-6 堀・鉢ヶ峯



図-7 泉佐野・下大木林道
キシダマムシグサ



図-8 池田・五月山
ギャップにナンキン
ハゼ、サンショウ



図-9 能勢・妙見
フデリンドウ



図-10 高槻・本山寺
風倒木整備地の
ナルトサワギクを抜く



図-11 大阪府外来生物
アラートリスト表紙

ンキンハゼ（「生態系被害防止外来種リスト」(環境省)）やサンショウの群落で今年は新たなケモノサインは薄め、一方で新たな場所でリスのサイン発見、という楽しみも。

泉佐野・下大木は隣接するエリアが「日根荘大木の農村景観」として府内唯一の「重要文化的景観」に選定されており、石垣、耕作地、畦道などモザイク状の環境で地域らしい種を確認。泉南・畔の谷も泉州の玉ねぎ畑の農村景観から阪和自動車道を境に化石やモウセンゴケが特徴的な巨石のエリアまでバラエティに富んでいます。

シカと森林の関係がテーマのクローズドコース、今回は箕面・鉢伏山(H604m)へ。シカのインパクトの累積で、一帯は歩くコースが判然としないほど下層植生は減退しています。アセビの他は低木も乏しく、枯死木も目立ち、急傾斜地では小規模な崩落も見られ、殺伐とした景観ですが、餌場としてのポテンシャル

ルが上がったのか、今までになく道中盛んにアピールするフクロウの鳴き声には嬉しくなりました。

「いつもの場所なのに気づかなかつた!」、「この先自然を見る目が変わる!」という参加者の感想から、それぞれの楽しい気づきが伺えます。

まだその爪痕が残るナラ枯れや2018年台風後の森林の遷移、土地変更など人為による搅乱、または放棄の影響。ほぼ同時期、同じコースで年ごとの自然の違い、変化をみる醍醐味、その地域らしさを知る面白さと意義をほんの1日ですが感じていただけたことでしょう。

トピックス

アカミミガメとアメリカザリガニが2023年6月「条件付特定外来生物」に指定され、「大阪府外来生物アラートリスト」(2023年6月)でこの2種を含む34種が紹介されています。「条件付」とは、広く飼育されており、当規制によって飼育許可手続

き回避のため野外へ放すリスク等を考慮し、捕獲、飼育、無償譲渡の禁止規制は適用除外とするものです。

里山一斎調査のフィールドでも生息が確認されているアライグマ、ソウシチョウ、ウシガエル、ナルトサワギクは在来の野生生物との競合や捕食など生態系への影響が懸念されています。しかし例えば家屋への侵入や農業被害対応としての捕獲、駆除はされても、山地や緑地での生態系被害については情報もなく、当事者が不在ともいえ、殆ど放置されているといつていいでしよう。

本リストでは「生態系被害が大きい種については、希少種が多く残る区域での防除が優先されます。被害が大きい種から優先的に対策の検討を進めています。」「見つけた場合のお願い…①捕獲や刈取り等による駆除 ②市町村等への連絡をお願いします。」とあり、野生での実効性が問われています。

